

博士学位論文審査要旨

申請者：苅宿紀子（早稲田大学教育学研究科博士後期課程教科教育学専攻 単位取得満期退学）

二松学舎大学・山梨英和大学・山口福祉文化大学 非常勤講師

論文題目：話し言葉におけるハダカ名詞のあり方とはたらき

申請学位：博士（学術）

審査員：主査 松木正恵 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

副査 森山卓郎 早稲田大学 文学学術院 教授 博士（学術）

副査 石黒 圭 一橋大学 国際教育センター 教授 博士（文学）

副査 仁科 明 早稲田大学 教育・総合科学学術院 准教授

1. 本論文の目的

本研究の目的は、話し言葉における「ハダカ名詞」のあり方を記述し、話し言葉において「ハダカ名詞」がどのようなはたらきをしているのかを探ることである。

話し言葉では、「わたし、帰るね」「学校、行ってくる」「これ、あげる」のように、名詞と述語とが格関係を有するときに名詞が助詞を伴わずにハダカで現れる現象、いわゆる「無助詞」現象がしばしば見られる。ハダカ名詞は書き言葉にはほとんど現れることはなく、話し言葉において特徴的な形式であるため、書き言葉と話し言葉の違いを考察し、話し言葉のしくみを知る上で重要な現象である。また、ハダカ名詞と有助詞名詞とで意味が違うのであれば意味論的にも重要な現象といえる。

いわゆる「無助詞」現象についてはこれまでも多くの先行研究があるが、助詞の使用の可否には種々の要因が関わっており、ハダカ名詞になる条件は未だ明らかにされていない。もちろん、ハダカ名詞が文の中でどのような機能を果たしているか、どのような文でハダカ名詞となるのか、といった構文レベルの分析についてはこれまでの先行研究でも論じられてきた。しかし、ハダカ名詞が話し言葉に多い現象であるわりには、ハダカ名詞の「談話」におけるあり方やはたらきについてはほとんど論じられてきていない。ハダカ名詞が話し言葉に多い現象であるならば、構文レベルの分析にとどまらず、談話レベルでハダカ名詞がどのようなあり方をし、またどのようなはたらきをしているのかを考察しなければ、その本質には迫れない。

そこで本研究では、既存の話し言葉コーパスを用いて調査・分析を行い、ハダカ名詞がどのようなときに出現しているのか、そして、談話においてどのようなはたらきをしているのか、実際の現象を記述した。また、このことをもとに、話し言葉のしくみについても考察を加え、書き言葉と話し言葉の違いを明らかにするとともに、その連続性にも言及している。

2. 本論文の構成

本論文は、序章・終章を含め全6章構成で、目次は以下の通りである。

序章

- 1 研究の目的
- 2 本稿の構成
- 3 ハダカ名詞に関する先行研究
 - 3.1 先行研究の用語と本論文の用語
 - 3.2 ハダカ名詞の中で無助詞名詞だけを扱う先行研究
 - 3.3 助詞省略名詞と無助詞名詞とを区別し、両者を扱う先行研究
 - 3.4 助詞省略名詞と無助詞名詞の区別をせずに、まとめて扱う先行研究
 - 3.5 先行研究からわかること

- 3.6 構文レベルの分析の課題
- 3.7 談話レベルの分析の課題
- 3.8 まとめ
- 4 本研究の立場と課題
- 5 用語の確認
 - 5.1 ハダカ名詞とはだか格
 - 5.2 ハダカ名詞と無助詞形式
 - 5.3 ハダカ名詞といわゆる「無助詞」
 - 5.4 助詞省略名詞・無助詞名詞と遊離名詞
 - 5.5 助詞省略名詞と無助詞名詞
 - 5.6 助詞省略名詞・無助詞名詞と無助詞格・無助詞題目
 - 5.7 助詞省略名詞・無助詞名詞と無助詞文
 - 5.8 発話と文
 - 5.9 まとめ
- 第1章 調査資料と対象語
 - 1 先行研究における話し言葉と書き言葉
 - 1.1 「話し言葉」「書き言葉」という用語の多義性
 - 1.2 話し言葉と書き言葉の相違点
 - 1.3 話し言葉の分類
 - 1.4 まとめ
 - 2 本稿における話し言葉と書き言葉
 - 2.1 「話し言葉」と「書き言葉」に関わる用語の使い分け
 - 2.2 話し言葉と書き言葉の分類
 - 2.3 まとめ
 - 3 「話し言葉におけるハダカ名詞」の考察に重要な観点
 - 4 話し言葉と書き言葉についてのまとめ
 - 5 調査資料
 - 5.1 ①『女性のことば・職場編』②『男性のことば・職場編』
 - 5.2 ③『日本語話し言葉コーパス』
 - 5.3 ④BTS ⑤BTSJ
 - 5.4 ⑥『ビューティフルライフ』⑦『拝啓、父上様』
 - 5.5 本稿で扱わない資料
 - 5.6 各コーパスの用語と本稿での扱い
 - 6 調査対象語
 - 7 資料ごとの用例数
 - 7.1 ガ格の名詞の用例数
 - 7.2 ヲ格の名詞の用例数
 - 7.3 ニ格の名詞の用例数
 - 8 まとめ
- 第2章 ハダカ名詞のあり方
 - 1 ハダカ名詞の場面別出現傾向
 - 1.1 調査結果と考察
 - 1.2 まとめ

- 2 節の種類と名詞の位置
 - 2.1 先行研究と本稿の立場
 - 2.2 ガ格の調査結果
 - 2.3 フ格の調査結果
 - 2.4 ニ格の調査結果
 - 3 深層格による分類
 - 3.1 先行研究と本稿の立場
 - 3.2 「が」の深層格
 - 3.3 「を」の深層格
 - 3.4 「に」の深層格
 - 4 述語の語種・語構成別による分類
 - 4.1 ガ格の調査結果
 - 4.2 フ格の調査結果
 - 4.3 ニ格の調査結果
 - 5 まとめ
- 第3章 無助詞名詞のはたらき
- 1 ガ格の名詞
 - 1.1 分類結果
 - 1.2 ガ格の助詞省略名詞
 - 1.3 ガ格の無助詞名詞
 - 1.4 まとめ
 - 2 フ格の名詞
 - 2.1 分類結果
 - 2.2 フ格の助詞省略名詞
 - 2.3 フ格の無助詞名詞
 - 2.4 まとめ
 - 3 ニ格の名詞
 - 3.1 分類結果
 - 3.2 ニ格の助詞省略名詞
 - 3.3 ニ格の無助詞名詞
 - 3.4 まとめ
 - 4 ハダカの普通名詞のはたらき—形容詞述語の分析から—
 - 4.1 調査方法と用例数
 - 4.2 名詞の情報性による分類について
 - 4.3 「普通名詞+が」の用例と考察
 - 4.4 「普通名詞+は」の用例と考察
 - 4.5 「ハダカの普通名詞」の用例と考察
 - 4.6 まとめ
 - 5 無助詞名詞のはたらき
- 第4章 遊離名詞のはたらき
- 1 ハダカの自称詞—言わなくてもわかるときに言う「わたし」の機能—
 - 1.1 先行研究と本稿の立場
 - 1.2 調査にあたって

- 1.3 調査結果
- 1.4 用例と考察
- 1.5 自称詞の機能の分類結果
- 1.6 まとめ
- 2 ハダカの対称詞——「呼びかけ」の周辺——
 - 2.1 先行研究と本稿の立場
 - 2.2 調査にあたって
 - 2.3 調査結果
 - 2.4 助詞が使われた用例と考察
 - 2.5 ハダカの対称詞の用例と考察
 - 2.6 まとめ

終章

- 1 結語
- 2 本研究の意義
- 3 今後の課題

既発表論文・口頭発表と本稿の関係

参考文献

資料（別冊）

3. 本論文の各章の概要

【序章】

序章ではまず、ハダカ名詞に関する先行研究とその問題点に触れる。ハダカ名詞の先行研究の中で、「意味・機能」を中心に論じているものは大きく分けて3つに分けられる。ハダカ名詞の中で無助詞名詞だけを扱うもの、助詞省略名詞と無助詞名詞とを区別し両者を扱うもの、助詞省略名詞と無助詞名詞の区別をせずにまとめて扱うもの、である。これらの先行研究で明らかにされている点をまとめると、以下のようになる。

- ① 助詞がない形式が現れる格はガとヲと「ニの一部」である。
- ② 話し手や聞き手を表す名詞、現場指示の指示詞が使われた名詞など現場にあるものを表す名詞が主題の場合、「無助詞」となる。
- ③ ②の場合、ハの対比、ガ(その他の格助詞)の排他的意味を表さないために「無助詞」となる。
- ④ 新たな話題を提示する場合、「無助詞」となる。

これまで行われてきた構文レベルの分析は種々の文が同様に扱われていたが、条件をそろえて分析した方が、ハダカ名詞の出現要因を明確にできると考えられる。また、談話レベルの分析における、談話中での出現位置や、談話レベルでの機能についてはこれまで詳しく論じられておらず、話し始めのきっかけのために用いられている<例1>のようなものについては分析されていない。

<例1>6173:11A あたしーのほうがね、あげなきゃいけないのに。[F20]

6174:11H <笑いながら>あかし[ⓧ]韓国語やろうかな。[F20] [女性/雑]

<例1>は意志を表す述語であり、「あかし」と明示しなくても、「やろうかな」の主体は話し手自身であるとわかる。主体がわかるにも関わらず「あかし」と述べているが、なくてもよいわけではなく、むしろある方が自然な表現である。「あかし」がある方が自然なのは、このような「あかし」が文の中で「主体」を示す、というだけでなく、「なんか」や「ていうか」のような話し始める際のきっかけの表現となっているからだと考えられる。

以上をふまえ、本論文では、書き起こし資料を用いて、<例1>のような無意識に行われる話し言葉に特徴的な形式をも含めて、ハダカ名詞をとらえている。

ハダカ名詞の談話機能を明らかにするために、本論文では以下のような枠組みでハダカ名詞を設定する。実際に「無助詞」の用例には、助詞を入れても入れなくても発話全体の意味が変わらないと考えられる用例があり、そのような用例は助詞復元可能と見ることができる。一方で、助詞を入れると助詞がない用例とは発話全体の意味が変わってしまう用例も見られる。その場合は助詞復元不可能であると考えられる。両者の用例が実際に存在することから、本論文では両者が共存しているという立場をとり、考察を進めている。

[表 1] で示したように、助詞復元不可能な表現の中に、二つの領域があるという立場で考察する。先行研究では「無助詞」という用語が頻繁に用いられているが、「無助詞」という用語を使うことによって、述語との関係性が弱いものへの連続性が見えにくくなり、その分析が、助詞を使った表現との比較に終始してしまうと考えられる。先行研究でのいわゆる「無助詞」を、本論文では「ハダカ名詞」と呼ぶ。「ハダカ名詞」とは助詞を伴わずそのままの形で表出する名詞である。本論文では、「ハダカ名詞」を以下の三つに分けて考える。助詞を入れても文全体の意味が変わらない、単なる助詞の省略と考えられる「助詞省略名詞」、助詞を入れると「対比」や「排他」の意味が生じるため、それらの意味を表さないために用いられる「無助詞名詞」、「名詞+は」「名詞+が」とは別の機能を有するために助詞を使わずに表現する「遊離名詞」の三つである。

[表 1] 本論文におけるハダカ名詞の領域区分

ハ ダ カ 名 詞	A「助詞省略名詞」 〔助詞復元可能〕	B「無助詞名詞」 〔助詞復元不可能〕
	格助詞、係助詞「は」を省略して表現している	対比や排他の意味を表さないために助詞を使わないで表現している
	(格助詞や「は」を入れても文全体の意味が変わらない)	(格助詞を使うと排他、「は」を使うと対比の意味が生じる)
	C「遊離名詞」 〔助詞復元不可能〕	
	名詞+「は」、名詞+「格助詞」とは別の機能を有するので、助詞を使わずに表現している	
	(そもそも「は」や「格助詞」を使って表現することはできない)	

【第 1 章 調査資料と対象語】

1. 話し言葉と書きことば

ここではまず、「話し言葉」と「書き言葉」をどのように分けるか、という試案を提示している。「話し言葉」と「書き言葉」の分類を考えることは、調査資料の性質とその位置付けを確認するためにも必要なことである。本論文では、5つの観点を用いてその分類方法を提示した。

2. 調査資料

本論文では以下の資料を用いて調査を行っている。

- ①現代日本語研究会(編)(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- ②現代日本語研究会(編)(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- ③国立国語研究所(2004)『日本語話し言葉コーパス』
- ④宇佐美まゆみ監修(2007)『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話(1)(2007 年版)』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
- ⑤宇佐美まゆみ(2007)『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 1 (初対面・友人、雑談・討論・誘い)』「談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作」平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2) (課題番号 15320064) 研究成果
- ⑥北川悦吏子 (2000)『ビューティフルライフ』角川書店 セリフの会話部分

⑦倉本聰（2006）『拝啓、父上様』理論社 セリフの会話部分

3. 調査対象語

i ガ格のハダカ名詞 ii ヲ格のハダカ名詞 iii ニ格のハダカ名詞 iv 名詞+が v 名詞+を
vi 名詞+に vii 名詞+は（ガ格） viii 名詞+は（ヲ格） ix 名詞+は（ニ格）

（参考として）以上の i～ix に間投助詞が付いた用例

名詞と述語との関係が格助詞の「が」で表せるもの、「を」で表せるもの、「に」で表せるものとする。「が」「を」「に」以外の格助詞で表せる関係が全く「ハダカ名詞」で現れないわけではないが、本論文では「ハダカ名詞」の中心的な格関係を中心に記述している。

【第2章 ハダカ名詞のあり方】

第2章では、ハダカ名詞のあり方を明らかにするために、「1 ハダカ名詞の場面別出現傾向」「2 節の種類と名詞の位置」「3 深層格による分類」「4 述語の語種・種類別による分類」という四つの観点から考察を行っている。

「1 ハダカ名詞の場面別出現傾向」については、ハダカ名詞の出現には改まりの度合いがもちろん関係しているが、それだけではなく、言葉のまとまりが「やりとり」によってつくられるときにハダカ名詞が用いられると指摘している。

「2 節の種類と名詞の位置」については、ガ格のハダカ名詞の場合には重要な要因であることが示された。ガ格の場合には、“B 類後続要素あり”のハダカ名詞の集計が24%、“B 類後続要素なし”が31%、“C 類”が32%、“主節”が38%で、“B 類後続要素なし”と“C 類”はほぼ同じ割合だが、独立性の低いものから高いものへとハダカ名詞の割合が増えていることが証明された。

また、名詞の位置から考えると、“B 類で後続要素あり・奥”の用例が最もハダカ名詞の割合が少なく、“主節で当該名詞が発話の頭”の用例が最もハダカ名詞の割合が多いことがわかる。小さい係り受けの方がハダカ名詞の割合が少なく、大きい係り受けの方がハダカ名詞の割合が多いといえる。

「3 深層格による分類」については、ガ格の名詞は深層格によってハダカ名詞が不適格になることはないが、より独立性の高い節の方がハダカ名詞の出現率が高くなり、また、名詞の位置が発話の頭の場合にハダカ名詞の出現率が高くなることが示された。

ヲ格については、文法的にはどの深層格でもハダカ名詞が出現しうるが、ほとんどが対象の用例である。ヲ格については、先行研究では「ヲ格は格助詞の省略が起こりやすい」という記述のみであったが、本論文ではヲ格の対象を示す用法をさらに下位分類して考察を深めている。その結果、ガ格やニ格に比べ、ハダカ名詞の出現率は高いが、「置く」「入れる」「付ける」など、場所のニ格が共起しうる動詞の場合にはハダカ名詞の出現率が低いことがわかった。それは、ニ格・ヲ格両方の可能性があるという意味がとりにくくなるからではないかと考えられる。

ニ格については、そもそもガ格やヲ格と比べてハダカ名詞の出現率が低く、到着場所や存在場所を表す場合にしかハダカ名詞が見られない。ニ格のヒト名詞は助詞を使わなければガ格と間違いやすく文法的にハダカ名詞が出現できないからである。先行研究では、ニ格は到着場所（着点）の用法の時しかハダカ名詞にならないと述べられていたが、実際は着点の用例は「行く」の用例が大半であり、目的の用法の場合でも述語「行く」の場合にはハダカ名詞と結びつく用例が見られ、着点というよりは「行く」と結びつく場合にハダカ名詞であることが多いと推定している。

「4 述語の語種・種類別による分類」からは、漢語は和語に比べてハダカ名詞の出現率が低いことが示された。漢語は同音語が多く、元々書き言葉で多用され、やりとりよりは一方的な説明で使われることが多いために、そのような結果になったのではないかと考察している。

【第3章 無助詞名詞のはたらき】

第3章では、助詞省略名詞と無助詞名詞の典型的な例の抽出を試み、無助詞名詞についてはそのはたらきにつ

いて考察している。“B類で後続要素あり・奥”の用例は、ハダカ名詞と「名詞+が」とが文体的な価値は異なつたとしても、発話の「意味」そのものは変わらない。このような小さい係り受けのハダカ名詞は「助詞省略名詞」の典型的な例である。“主節で発話の頭”のハダカ名詞は、すべてが無助詞名詞とはいえないが、「名詞+は」「名詞+が」との意味が異なるものもあり、無助詞名詞であるものもあつた。無助詞名詞は、やはり《文》の機能を持つ節の中で、主題として用いられているハダカ名詞であるといえる。

ガ格については、名詞の種類と現場性がハダカ名詞の出現と深く関わっていることが示された。発話の場にあるものを指す自称詞・対称詞・コ系指示詞・普通名詞で無助詞名詞である用例が見られた。発話の場にはないものを指すハダカ名詞については、ア系指示詞や一部の普通名詞で無助詞名詞と考えられるハダカ名詞が出現した。これらの用例から、ハダカ名詞が無助詞名詞であるのは、話し手と聞き手とが共有しているものを指す場合である可能性が高いと考えられる。そこで、名詞が普通名詞で、述語が形容詞の用例をもとに検証を行ったところ、“新出で定”の名詞であるときに無助詞名詞であり、やはり話し手と聞き手とが共有するものを指していることが明らかになった。以下のような用例である。

<例 2>3531:08A 研究授業[㊦]おかしかったのよねー。[F50]

3532:08A 図工の研究授業。

3533:08C あ、この、この前のあの、おっきい絵をかいたやつ。[F40] [女性/雑]

<例 2>は 3531 の発話の前では学校の図工の話をしているが、研究授業の話はしていない。前の部分と関連はあるものの、用例のところではじめて「研究授業」のことが出てくる。話し手である 08A は聞き手と共有している「研究授業」について述べているが、話し手 08C が「研究授業」と聞いただけでは理解できなかったと判断し、「図工の研究授業」と説明を加えている。その結果、話し手 08C もどの研究授業のことか思い出したという用例である。この例でははじめは「研究授業」と言っても聞き手に伝わらなかったが、話し手 08A としては共有していると考え、「定」の名詞としてあげていたのである。用例部分の「研究授業」は新出であるが、「は」を使うと既出のように感じられ元々その話をしてきたかようになってしまい、一方、既出でないとするれば、他におかしくなかった何かと対比するような発話になってしまう。また「研究授業が」と言ってしまうと、08C が知らないことを話し始める発話になり、08C の意図とは異なる発話になってしまう。

<例 2>のように、その発話の場ではまだその話をしていないが、話し手と聞き手とが共有している具体的なものを指すときには「は」も「が」も対比や排他的の意味を含意せずには使えない。“新出・定”の名詞を“主節・発話の頭”で使う場合は、ハダカ名詞特有の領域ということになる。普通名詞で述語が形容詞の場合、無助詞名詞は、その名詞が聞き手と共有しているものを新たな話題として導入するはたらきがあるといえる。

「談話」の場合には言語外にも話し手と聞き手とが共有しているものがあるため、“新出”でも“定”ということがありうるが、「文章」の場合、“新出で定”の名詞というのはそもそも出現しにくいものである。「無助詞名詞」は複数の言語主体で言葉のまとまりを作り出す「談話」特有の名詞であるといえる。

【第4章 遊離名詞のはたらき】

第4章では、自称詞と対称詞を例として、遊離名詞のはたらきを明らかにしている。

1. ハダカの自称詞一言わなくてもわかるときに言う「わたし」の機能一

自称詞の場合、言わなくても主体が話し手だとわかるときにも用いられることがあり、それが前掲<例 1>のような例である。これらの例の自称詞は、言わなくても主体がわかるといっても、自称詞を使った方が自然な表現となる。

上記のような例について、「言わなくてもわかるときに言う」ハダカの自称詞は、単に新規の話題を導入するためだけに用いられるのではなく、話題を始めるきっかけの言葉として「なんか」や「ていうか」などと似たように用いられていると指摘する。発話内容が定まっていない場合には、フィラーのように「間をつなぐ」ために使われたと考えられる例もある。談話の場合には、「わたしは」「わたしが」で話を始めるのはやや不自然である。話を始める場合には、「話を始める」ことを示す表現が必要であり、ハダカの自称詞は「話を始める」きっかけの

表現としても使えるが、「自称詞+助詞」は「話を始める」表現にはならない。このようにハダカの自称詞は談話展開のために使われることがあると主張している。

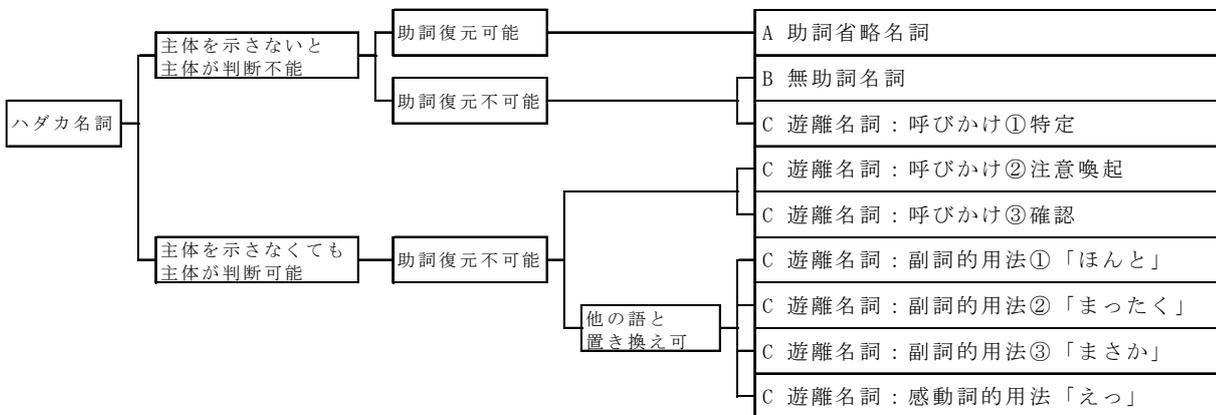
ハダカの自称詞の機能として指摘した“ある時点から話を始めたり、相手と話している中で話題を転換したり間をつないだりする”談話展開の指標は文章には必要のないことで、交替を前提とした「発話」からなる談話だからこそ必要となることである。ハダカの自称詞には話し手の態度を表す例も見られたが、内容を強調して聞き手に訴えかけたり、自分の意見を個人的意見として聞き手への配慮を示したりするのも、談話であるからには必要なことである。談話において、どの助詞を入れることもできないハダカの自称詞が見られるのは、いわゆる「無助詞」現象が、複数の言語主体が言葉のまとまりをつくるという談話の特徴と結びついているからだといえる。

尾上(1996)（「主語にもガも使えない文について」(日本認知科学会第13回大会ワークショップ資料)）では「情報価値はなく、ただつけているだけ」と述べられているが、構文上の価値はなくとも、わかっていることをわざわざ言うということは、そこに何らかの意味があるということであり、「わたし」をはじめとする自称詞には、主体の明示という構文上の機能のほかに、談話における機能があるのではないかと筆者は指摘する。言わなくても話し手自身のことだとわかるときに、話し手がわざわざ「わたし」と言って自分が主体であることを表現するのは、主格の明示のためだけではなく、そのような「わたし」が「談話展開」や「話し手の態度」と結びついているからである。つまり、「言わなくても」主体が「わかる」からといって、ハダカの自称詞がなくても良いわけではなく、その場合には談話機能があると見なせる、という主張が展開されている。

2. ハダカの対称詞——「呼びかけ」の周辺——

対称詞については、述語との関係が「主体」の関係と見なせるハダカ名詞の用例について分類すると、大きく分けて4つの用法に分けられる。「A 助詞省略名詞」「B 無助詞名詞」「C 遊離名詞：呼びかけ」「C 遊離名詞：副詞的用法・感動詞的用法」である。

[表2] 対称詞のハダカ名詞の分類



「C 遊離名詞：呼びかけ①特定」は複数名で話しているときに一人を「特定」して呼びかける用法で、そもそも「は」や「が」が使えない用法である。「②注意喚起」や「③確認」も呼びかけではあるが、一対一で話しており、主体を示さなくても質問や依頼の表現であれば対称が主体であるとわかる用例である。あえてもう一度呼びかけて対称の注意をひいたり、対称の話であることを確認したりしている。「C 遊離名詞：副詞的用法・感動詞的用法」は主体を示さなくても対称が主体であるとわかるが、対称詞が使われている用例で、「驚き」「あきれ」「程度強調」を表すなど、単なる主体を明示しているだけではなく、話し手の気持ちを含めて表す用法である。

A から C の用法があることから、対称詞には述語との結びつきが強く主体を明示するための用法から、述語との結びつきが弱い用法までであると考えられる。述語との結びつきが弱い C の用法は談話ならではの用法であり、対称詞の「無助詞」現象が談話の特徴と結びついていることを示している。

ハダカの対称詞の副詞的用法・感動詞的用法といっても、他の副詞や感動詞とまったく同じ意味になるわけで

はない。対称詞のハダカ名詞の方が聞き手への働きかけが強く表されるという。自分が述べていることが本当なのだと強調したかったり、聞き手が述べたことにあきれたり驚いたりしたとき、また、話し手の心情を表出することで聞き手への働きかけを強めたいときに、ハダカの対称詞が副詞的・感動詞的に使われると主張する。

先行研究では「聞き手が主題の文」は「ハもガも使えない文」であると述べられているが、「呼びかけ」の可能性について論じているだけで、「呼びかけ」との関わりは詳しく述べられていない。しかしハダカの対称詞の連続性の様相を見ていくと、主題とも呼びかけとも考えにくい、さらに述語との結びつきが弱い用法が多く見られた。そしてその用法は、話し手から聞き手への働きかけが強い用法であり、談話に密着した用法であるといえる。

先行研究のように、あくまでも「無助詞」が研究対象であり遊離名詞は「無助詞」研究に入らない、ということであれば、いわゆる「無助詞」現象を「無助詞」と呼ぶのは適切である。助詞の有無で説明できる範囲での検討だからである。しかし、いわゆる「無助詞」をハダカ名詞と考え、助詞がある場合との比較ではない別の観点から遊離名詞を見ていくことで、ハダカ名詞の談話でのはたらきが見えやすくなったとしている。このように、これまでの先行研究では論じられてこなかった、主題と呼びかけの連続性を検証した結果、呼びかけにも入らないような用法があり、ハダカの対称詞が談話と密着したはたらきをしていることが明らかになった。

【終章】

1. 本研究の意義

ハダカ名詞は話し言葉に多く見られる表現であるが、従来の先行研究では構文レベルの分析のみに偏り、ハダカ名詞の話し言葉における機能についてはほとんど論じられてこなかった。しかし、話し言葉におけるハダカ名詞のはたらきを明らかにしなければ、ハダカ名詞の本質には迫れない。ハダカ名詞の構文的な意味・機能だけでなく、談話レベルでの機能について実証的に考察したところに本研究の意義がある。

本研究は、自称詞と対称詞を例として、ハダカ名詞が談話展開のために用いられ、話し手から聞き手へのはたらきかけが表されたりする様相を記述することを通して、ハダカ名詞は話し言葉の中でも「やりとり」と関わる表現である、という点を談話レベルの分析から明らかにしたものと見える。

2. 今後の課題

①音声による話し言葉の分析、②書き言葉での名詞のあり方、③ガ格・ヲ格・ニ格以外のハダカ名詞のあり方、などについては今後の課題として取り組み、書き言葉も含めた包括的・体系的な記述を目指したいとしている。

4. 総評

本論文は、話し言葉における「ハダカ名詞」について、話し言葉コーパスを用いてそのあり方の多様性を記述するとともに、話し言葉において「ハダカ名詞」がどのようなはたらきをしているのかを明らかにしようとしたものである。本論文の成果として、以下の5点が指摘できる。

第一に、記述的なコーパス研究の手本とも言うべき方法（全数調査・集計方法の統一性・集計対象の明確性・必要情報の網羅性）を取り、膨大なデータの整理によって、これまで仮説に過ぎなかった先行研究の知見に実証性を加えることに成功している。

第二に、従来のいわゆる「無助詞」を、助詞を入れても文全体の意味が変わらない単なる助詞の省略である「助詞省略名詞」、助詞を入れると「対比」や「排他」の意味が生じるためそれらの意味を表さないように用いられる「無助詞名詞」、「名詞+は」「名詞+が」とは別の機能を有するために助詞を使わずに表現する「遊離名詞」に三分類するとともに、名詞と述語との関係性の強弱をもとに、三者を連続的に位置づけようとしている。

第三に、特に「無助詞名詞」については、その論証プロセスで提示された「定／不定」「新出／既出」を組み合わせた考え方がこれまでにない新しい視点であり、今後の展開に可能性を感じさせる。

第四に、いわゆる助詞脱落現象について、談話レベルでの考察を取り入れた点が新しい。特に「遊離名詞」の機能として談話の開始・転換を考えるという観点は、従来の研究をさらに一歩進めたものとなっており、発想のオリジナリティが評価できる。

第五に、ハダカ名詞の出現状況をもとに、話し言葉のしくみについても考察を加え、書き言葉と話し言葉の違いを明らかにするとともに、その連続性にも言及している。

ただし、以下の点が課題として指摘された。

第一に、「助詞省略名詞」「無助詞名詞」「遊離名詞」という区別は有意義だが、先行研究の再整理という面も否定できない。先行研究の様々な観点を取り入れているのは長所でもあるが、それだけに論の展開がやや曖昧なものとなってしまった印象も受ける。話し言葉では助詞がないのがデフォルトで、必要なときにだけ助詞がつくもの、という筆者の根本的な発想を、もっと前面に出して論じた方がよかったのではないかと思われる。

第二に、「助詞省略名詞」「無助詞名詞」「遊離名詞」の三分類は、そのままそれぞれ文体レベル・文法レベル・談話レベルの問題となり、ややもすればそれらが混同されたまま議論が進む感も否めない。また、談話レベルでの分析の重要性を強調するわりには、先行研究が文法研究に偏っており、言語使用域に関するコーパス研究や、会話分析をはじめとする社会言語学的研究が手薄であった。今後、これらの方面についても幅広く見ていく研究姿勢が求められる。

第三に、「遊離名詞」と談話展開との関連性についての考察が、本論文中最も独創的で興味深い点だが、助詞が脱落した名詞句に「主題提示」「程度強調」「フィラー」などの機能を見いだすのは、多少行き過ぎの感もある。こうした機能は結果的にそう出ているように見える語用論的なものであるため、それぞれそうした機能を本務として持つ他の形式と何が違うのか、どうしてそのような表現機能を帯びるのかについての議論が必要である。

第四に、ガ格・ヲ格・ニ格という格ありきではなく、ある動詞にとって必須度の最も高い助詞が落ちる傾向にあると考えると、動詞と名詞のタイプをもとに格横断的な分析をすることで、これまでの格整理とは異なる新しい結合価文法が構築できる可能性があったのではないか。その点についての見通しが望まれる。

以上により、審査員一同、本論文は博士(学術)を授与するに値するとの結論を得たことを、ここに報告する。